「岩割の松」（次郎物語/下村湖人　第二部）の話です。長いですが「次郎物語」より引用します。

叔父の家に預けられた次郎が、叔父、徹太郎と孫の恭一と３人でハイキングに出かけ、
山の中腹で弁当を食べながら大きな岩の裂け目に根を張っている松の木について話したエピソードです。

「君たちには、あの岩が動いているのがわかるかい。
眼で見ても分からんよ。心で見なくちゃあ」

徹太郎が次郎と恭一に、松の木の根元の岩を指しながら、だしぬけに尋ねます。

「あの松の木だ。何百年かの昔、一粒の種が風に吹かれて
あの岩の小さな裂け目に落ち込んだとする。
それは、その種にとって運命だったんだ。
つまり、そういう境遇に巡り合せたんだね。
そんな運命に巡り合わせたのはその種のせいじゃない。
種自身では、それをどうすることも出来なかったんだ。
どうすることも出来ないことを恨んだりしたって何の役に立つものではない。
それよりも、喜んでその運命の中に身を任せることだ。」

「身を任せるというのは、どうなってもいいと言うんじゃない。
その運命の中で気持ちよく努力することなんだ。それが本当の命だ。
あの松の木の種には、そういう本当の命があった。
だから、ついには運命の岩をぶち破り、
岩をつき抜けて根を地の底に張ることが出来たんだ。
芽をだしたばかりの松は、どんなに力んでみてもすぐには、岩は割れない。
岩を割る力は幹の堅さではなくて、命の力なんだ。
じりじりと自分を伸ばしていく命の力なんだ。
だから、運命に勝ちたければ、じりじりと自分を伸ばす工夫をするに限る。
勝つとか負けるとか言うことを忘れて、ただ自分を伸ばす工夫をしてさえ行けば、
それが勝つことになるんだ。
自分を伸ばすためには先ず運命に身を任せることが大切だ。
岩の割れ目で芽をだしたら、割れ目を自分の住家にして、
そこで楽しんで生きる工夫をするんだ。
それでこそ、本当に自分を伸ばすことができるんだ。
運命を喜ぶものだけが正しく伸びる。
そして、正しく伸びるものだけが運命に勝つ。
そう信じていれば間違いはないね‥‥」　と

「次郎物語」　NHKテレビドラマ　テーマ曲　昭和39年

作詞：横田弘行　作曲：木下忠司　歌：ペギー葉山

一　ひとりぼっちの次郎はのぼる
　　ゆらゆら　ゆらゆら　かげろうの丘
　　ひとりぼっちの次郎はのぼる
　　ぴいろろ　ぴいろろ　ひばりの峠
　　次郎　次郎　みてごらん
　　松の根は　岩をくだいて　生きて行く

二　ひとりぼっちの次郎はころぶ
　　ちらちら　ちらちら　こな雪のあぜ
　　ひとりぼっちの次郎はころぶ
　　つんつん　つんつん　凍った堤
　　次郎　次郎　みてごらん
　　白鳥は　風に向かって　飛んで行く

三　ひとりぼっちの次郎はかける
　　ほうろろ　ほうろろ　ふくろうの森
　　ひとりぼっちの次郎はかける
　　からから　からから　落葉の林
　　次郎　次郎　みてごらん
　　北極星は　じっとひとりで　光ってる